



TITLE:

書評 入不二基義: 『時間と絶対と相対と』 (勁草書房, 2007, 291p.)

AUTHOR(S):

佐金, 武

CITATION:

佐金, 武. 書評 入不二基義: 『時間と絶対と相対と』 (勁草書房, 2007, 291p.). 哲学論叢 2008, 35: 254-257

ISSUE DATE:

2008

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/96259>

RIGHT:

書評

入不二基義: 『時間と絶対と相対と』
(勁草書房, 2007, 291p.)

佐金 武

物理主義と心身二元論、直接指示論と記述主義、真理の余剰説と反余剰説、そして実在論と反実在論。一度論戦が始まれば、哲学はゲーム化する。とりわけ、分析哲学においてこの現象は顕著だ。誰もが皆、ある哲学的議題をめぐって一つの陣営を選択し、論争に明け暮れる。このことを特に問題視したいわけではない。そうではなく、哲学的ゲームの意義を正しく理解しようとする、それもまた哲学の重要な営みだということに注意を促したいのである。

入不二の『時間と絶対と相対と』は、そうした哲学的野心に打ち満ちている。時制理論と無時制理論の対立を基調とする時間論をはじめ、本書で論じられる諸問題は、絶対主義対相対主義、宿命論対反宿命論のように、論争的色合いの濃いトピックである。しかし、著者入不二のスタンスは一貫して、一方の立場に肩入れした論証を与えることよりも、争点を限界まで鮮鋭に描き出すことを目指すものである。それはとりもなおさず、当の論争に関わる哲学者に根本的な反省を迫ることになるだろう。

序章において、著者自ら本書を概観しているので、ここではまず、扱われる内容にざっと目を通しておくにとどめたい。第 1

～3 章では、現在、未来そして過去の三様相がこの順に、それぞれ独立に考察される。第 4・5 章では、いわゆる「マクタガート問題」が吟味され、時制理論による解釈とも無時制理論による解釈とも異なる、第三のマクタガート解釈が提示される。第 6～8 章では、時間に関する先立つ論考にリンクする形で、相対主義に関わる諸問題が扱われる。最後の第 9 章においては、これまでの考察が交錯する地点として運命論が論じられる。

以下本書評では、マクタガートをめぐる論争背景を紹介しつつ、第 4・5 章における入不二の論考に焦点を絞って、そのオリジナリティーを明らかにしたい。

周知のように、マクタガートは、時間という概念は本質的に変化と関わるが、変化は矛盾を含み、よって時間は実在しないと論じた。これに対して、入不二は、時間固有の実在性を構成する本当の矛盾があると考えている。単に詭弁を弄しているのではない。問題は、時間に本質的といわれる変化とは何かということ、そしてこの変化がどのような矛盾を孕んでいるのかということにある。入不二の診断によれば、時制理論も無時制理論も、そしてマクタガート本人も、この問題の最深部には到達できていない。

マクタガートによる「時間の非実在性証明」の骨子は、次の通りだ。1) 時間の捉え方には、過去 (かつて一だった)・現在 (今一である)・未来 (やがて一だろう) という時制的区別による A-系列と、出来事間の前

後関係による B-系列という二つのものがある。2) 時間にとっては「変化」が本質的であり、それは A-系列によってこそ捉えられる。3) ゆえに、A-系列が時間にとって基礎的だ。4) しかし、A-系列には、同一の出来事が過去、現在そして未来であるという矛盾が含まれる。5) 時間にとって基礎的であるはずの A-系列に矛盾が見出された以上、時間は実在しない。

時制理論と無時制理論の対立は、概ねこうだ。前提 1) から 3) まです主張される、A-系列が時間にとって基礎的であることを受け入れ、4) において指摘される A-系列の矛盾を回避しようとする立場が、時制理論である。他方、A-系列は矛盾を含むと考える点ではマクタガートに同意するものの、A-系列が B-系列よりも時間の存在にとって基礎的という彼の議論は説得的ではないとする立場が、無時制理論である。

このように、時制理論と無時制理論は、二つの論点をめぐって対照的な立場をとるが、そのなかでも特に議論が白熱するのが、A-系列は矛盾を含むか否かという問題だ。時制理論は A-系列は実在するという立場であるから、ここに矛盾があるというマクタガートの論点を回避したい。他方、時間の存在にとっては B-系列だけで十分で、A-系列など実在しないと考える無時制理論にとって、マクタガートの議論は、対抗者を論駁するにはもってこいである。

こうして、時間をめぐる哲学はゲーム化する。時制理論も無時制理論もそれぞれの

立場を選択した後に、A-系列にあるといわれる矛盾を論じている。しかしながら、A-系列には矛盾が含まれるという後半部のマクタガートの主張は、時間にとって A-系列こそが基礎的だという前半部の議論と切り離して考えるべきではない。マクタガートの証明全体の有機的なつながりのなかで、彼の指摘したかった矛盾をきちんと理解できなければ、その意義を見失ってしまうことになるだろう。入不二いわく、マクタガート自身もまた例外ではない。

とはいえ、不幸にも上のような不理解が生じてしまうのは、一面無理もないことだ。まず、現代の時間論は、さしあたり別個の二つの問題を射程に入れていることに注意したい。一つは、時制を含む事実、そのようなものが存在するか否か、そしてそれがどういった類の事実なのかという問題がある。もう一つは、「時間の流れ」というときに意図されている、時間変化に特有の動性に関わる問題である。

これらがさしあたり別個の問題だと述べたのは、以下のような事情からだ。マクタガートの議論においては表向き、時間に固有の動性は時制を基礎として表現されねばならないと論じられていた。つまり、二つの問題はさしあたり別個とはいえ、時間固有の動性をめぐる第二の問題から、時制を含む事実の存在をめぐる第一の問題へと不可避な仕方で連結される。他方、時制理論と無時制理論の対立はしばしば、第一の問題について相対する二つの論陣を張った後、

第二の問題に論争の場を移す。二つの問題が別個である以上、なるほどマクタガートとは逆向きのこのような移行は可能である。

入不二もまた、マクタガートが意図したような仕方での二つの問題の連結は、それほど容易ではないと論じる。それは、次のような理由からである。マクタガートの前半部の論証では、「ものの状態変化」と「出来事の時間変化」が対比されている。たとえば、「火かき棒が時点 t において熱い」と「アン女王の誕生は過去である（アン女王がかつて誕生した）」の対比である。前者の言明の真理値は、時間を通じて変化しないが、後者の真理値は時々刻々変化する。したがって、時間に固有の変化にとっては、出来事の時間変化を表す時制こそが基礎的だと結論される。ところが、時間変化を可能にするといわれる、上のアン女王の誕生についての言明でさえ、「アン女王の誕生は2008年において過去である」のようにすれば、その真理値は変化しない。

入不二の考えるところでは、時間に固有の変化は、ものの状態変化と出来事の時間変化という対比によっては捉えることができない。このことが意味するのは、ものの変化にも出来事の変化にも、時間固有の動性が見当たらないということではない。むしろ、時間固有の動性はどちらにも浸透しており、上の対比を逸脱せざるをえないということだ。少なくともそのように考える立場が可能であり、マクタガートはこのことを見失っている。時間固有の動性をめぐ

る問題については、後にもう一度触れる。

さて、時制を含む事実の問題に関する入不二の見解を私なりに整理したい。まず、時制を含む事実が存在すると主張することは、時制がなければ表現できないような、そういう世界についての事実の存在を認めることに他ならない。では、それはどのような事実か。入不二はこれを、〈一つ性〉と〈独つ性〉という、「現在」のもつ二つの側面として記述する。

前者の〈一つ性〉とは、すべての時点等を等しく可能な現在として認めた上で、そのうちのどれか一つを選び出す現在性である。あるいは、どの時点もその時点においては現在だという意味での現在性である。これは純粹に指標的な現在性に過ぎず、時制を含む事実の存在を認めない無時制理論でさえ、そのような「現在」の使用法を否定しはしない。他方、そもそもすべての時点等を等しく視野に収める場としての現在がなければならぬと考えるなら、そのような現在は、可能的に現在である複数の時点のうちの一つという図式にはのりようがない。これは他に比べられるものがない、たった独つの現在というあり方をしているからだ。この意味では、過去や未来は可能的にも現在ではあり得ない。これが、〈独つ性〉としての現在性である。

独つの現在が、一つの現在という側面を帯びるという事態、これが決定的に重要である。〈独つ性〉としての現在が〈一つ性〉へと転化するとき、三つの時間様相はもは

や両立不可能なものとは見なされない。過去、現在そして未来は、〈一つ性〉としての現在に基づけば皆等価であり、そこに位置する出来事はそれぞれ、その時点においては同じように現在だということになる。

時間固有の動性の問題に戻ろう。既に述べたように、時間の動的側面を捉えるためには、時制があれば十分というわけではなかった。加えて、時制の相互排他性に訴えて、「アン女王の誕生が未来であるときには、その出来事は過去ではなく、過去ならば未来ではない」といつてみても、このような排他性はまだ時間の動性に届いていない。なぜなら、「ある対象が赤ならば、青くもなく黄色でもない」のように、概念的な、あるいはカテゴリーによる静的な相互排他性について同じことがいえてしまうからである。求められているのは、時間に特有の推移性に起因する、動的な両立不可能性だ。時間が存在するためには変化がなければならぬとマクタガートがいったとき、彼が論じるべきだったのはこのような、時間固有の動性ゆえの時制の両立不可能性だ、入不二はそう考える。

時間固有の動性それ自体は分析されることはないが、少なくとも二つの特徴が指摘されている。一つは、ものの変化と出来事の時間変化の区別を無効にする、時間固有の動性の「汎浸透性」だった。もう一つは、変化についての事実もまた変化を被るという、時間変化の「高階性」である。つまり、ある出来事が現在になるということもまた、

過去になるという変化を被るはずだ。

さて、入不二によれば、時間を構成する本当の矛盾は、マクタガートの論証を三つの仕方を書き換えることによって提示できる。第一に、時間固有の動性ゆえに両立不可能な時制という考えは、次のことと相容れない。「未来のことが現在になり、現在のことが過去になる」というとき、この記述自体は一挙に与えられ、そこに現れる三つの時間様相は同じ資格をもつものとして、両立可能のように扱われてしまっている。

第二に、〈独つ性〉としての現在は確かに、三つの時間様相の両立不可能性を示していた。過去や未来は決して、この意味での現在ではありえない。しかし、独つの現在が一つの現在に転化するとき、三つの時間様相は両立可能でもある。第三に、時間の動性と現在の〈独つ性〉の問題が連結されるとき、端的な現在自体が端的な現在でなくなるような変化が現れる。以上の入不二によるマクタガートの書き換えの正否については、読者に判断を委ねたい。

確かに、時間のなかに生きている我々が、時間の本性を追求するという試みにはどこか倒錯したところがある。結局のところ、それについては、「語り得ぬもの」として沈黙を守るべきなのだろうか。そうかもしれない。しかし、哲学的ゲームの一プレイヤーに過ぎない私としては、入不二の描いたマクタガートを大いに参考にしつつ、議論を継続することによって、よりはっきりとその限界を見定めたい気がする。